難病患者における訪問看護の利用実態と訪問看護ステーションの活動状況の分析
－訪問看護ステーション活動状況調査の実施－

○小松雅代　大槻美和　山本幸子　北神淳　髙木正博(葛城保健所)
森本めぐみ(健康づくり推進課)

【目的】

近年、高度医療により人工呼吸器を装着するなどの医療依存度の高い在宅療養患者の割合が増加している。また、特定疾患治療研究事業の対象疾患(以下難病)患者においても年々増加している。そのため、在宅療養支援における訪問看護の役割は更に重要である。今回、難病患者の在宅療養支援体制整備を目的に、難病患者の生活状況と訪問看護・介護保険等の申請実態、訪問看護ステーション(以下ST)の活動状況を分析し、保健所が取り組む課題を明らかにする。

【対象と方法】

1　難病患者

H23年度特定疾患医療受給者証更新予定者1989人のうち、H23年9月1日現在の申請者1785人(89.7%)を対象とした。調査項目は、臨床調査個人票の年齢、性別、発病からの年数、身体障害者手帳・介護保険認定の有無、生活状況(社会活動、日常生活)等について、難病56疾患を11の疾患系に分類し分析した。STの利用、医療費助成階層区分については、更新の申請状況にて把握した。

2　訪問看護ステーション

管内の13事業所と管内市町在住の神経・筋系疾患である筋萎縮性側索硬化症(以下ALS)患者の利用実績のある管外2事業所の計15事業所。調査項目は勤務職種、人数、平均訪問回数、24時間対応加算、難病患者の訪問等である。H23年1月下旬～2月に質問用紙を送付後、回答内容についてSTへ直接聞き取り調査を行った。

各々の項目についてカイ２乗検定を行い、$p<0.05$を有意とした。データの集計および統計処理はDr.spssⅡfor Windowsを用いた。

【結果】

1　難病患者の属性

平均年齢は58.7歳(SD±17.0)、男性803人(45.0%)、女性982人(55.0%)、訪問看護の申請は110人(6.2%)であった。全患者のうち、神経・筋系患者446人(25.0%)、消化器系419人(23.5%)と続いた。

ST 申請者では、重症認定者(33.6%)、介護保険認定者(70.9%)、身体障害者手帳所持者(66.4%)の方が、未認定者や未所持者より有意に多かった。

2　疾患系別の状況

神経・筋系患者においては、他の疾患系群より70 歳以上の者、ST 申請者、介護保険認定者の割合が多い傾向を示した(図1)。同疾患系患者の生活状況を見ても、「社会活動」の在宅療養、入院を占める割合が多かった。また「日常生活」では部分介助、全面介助の割合も同様に多かった。

3　訪問看護ステーションの活動状況　(表2)

回答率100%。看護職の平均常勤換算人数は4.7人(SD±1.3)で、5～7.5人未満の6事業所(40.0%)が最も多かった。他の職種配置は、事務職10(66.7%)、理学療法士7(46.7%)、作業療法士2(13.3%)と続いた。

訪問状況は、1か月の看護職1人あたり平均訪問回数は61.9回(±22.2)で、24時間対応体制加算を取っているSTは13(86.7%)と大半を占めた。ALS患者の訪問看護実績のあるSTは73.3%であった。

特定疾患医療受給者の訪問実人数は平均6.7人(±6.1)で、そのうち神経・筋系患者は82.2%を占めた。

図１　11疾患系別の訪問看護、身障手帳、介護保険の比較

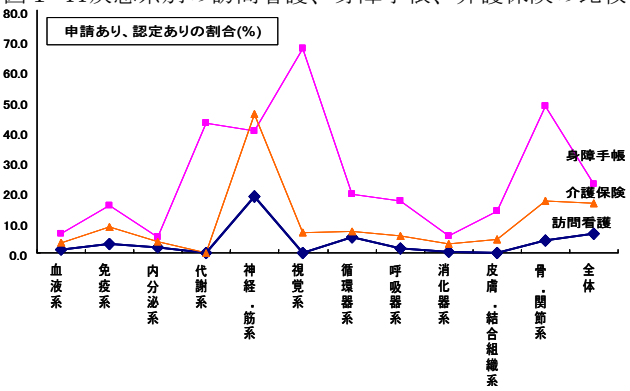

表１　訪問看護ステーション活動調査一覧表

訪問看護ステーション	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
所在地	W市				X市		Y町			Z市				管外	
常勤看護師(人)	3	1	4	1	5	3	4	2	2	2	5	4	4	3	2
非常勤看護師(人)	4	6	2	9		1	5	2	5	2	7	2		5	2
看護職常勤換算(人)	**5.9**	**2.8**	**5.2**	**6.1**	**5**	**3.5**	**7.2**	**3.7**	**2.5**	**2.7**	**9.6**	**2.7**	**2.5**	**7.2**	**3.5**
事務職(人)	1	1	1	1			1	1	1		2	0	1	1	
理学療法士(人)				1*	5	2*	2	2	4*			8			
言語療法士(人)					1		1*	1*				5			
作業療法士(人)					1							3*			
1か月の平均総訪問看護回数(NSのみ)／常勤換算(人)	76.3	66.1	53.8	36.9	110.0	42.0	63.5	54.1	92.0	55.6	90.6	51.9	30.8	62.5	42.9
24時間対応体制加算	あり											なし		あり	
ALS患者の訪問看護実績の有無	あり		なし	あり		なし	あり			なし		あり		あり	
特定疾患医療受給者の訪問実人数 H22.11月末現在	8	2	5	5	16	1	10	6	12	0	10	21	1	3	1
(再掲)神経・筋系疾患患者数のみ H22.11月末現在	7	1	5	5	14	1	6	4	10	0	9	17	1	3	0
神経・筋系疾患患者の占める割合(%)	87.5	50.0	100.0	100.0	87.5	100.0	60.0	66.7	83.3	／	90.0	81.0	100.0	100.0	0.0

*非常勤を含む

【考察】

今回、ST の活動状況と 11 疾患系別の ST 申請の状況等について分析し、改めて在宅療養における訪問看護のニーズと神経・筋系患者には関連があることが示唆された。また、STからは神経・筋系患者へ訪問看護を行うには、スタッフ間の技術・経験の差や、地域主治医との連携等における課題が挙げられていた。

発病からの年数や、病状の進行程度によって ST 導入の必要性や時期が異なる。適切な時期にスムーズな ST 導入を図るためには、疾患系別の患者の特徴を分析し、難病患者・家族との信頼関係を築き、定期的なフォロー体制を整備することが求められる。保健所は、難病申請により多くの難病患者の情報が寄せられ、患者本人やその家族との面接を行い、より詳細な状況や情報入手が可能である。そして保健所は、難病患者の在宅療養を支える地域の社会資源(医療機関・ST・福祉関係等)と難病患者に関する情報や地域の課題について共通理解と認識を深め、解決策に向けたネットワークを充実していくことが求められる。